

# 1. JSL国語科の基本的な考え方・指導の方法

## 1-1 JSL国語科の考え方

第1言語の獲得をみると、子どもはいきなり話し出すわけではない。周りの人たちから話しかけられる言葉を耳にしながら、言葉を使わない時期にも、子どもは様々な方法で周囲とのやりとりを行なっている。言葉の理解と発話（言葉の産出）は、決して同時期に成立するのではなく、理解が先行する。そして、一語発話期、一語文から二語文へと意味のある言葉、内容語（名詞、形容詞、動詞など）を発する段階を経て、徐々に複雑な文法体系を身に付けていく。

また、初期段階においては、話し言葉によって言葉を獲得する。日常生活での話し言葉でのコミュニケーションでは、現実的で具体的な話題が中心であるため、言葉だけではなく、会話が行われる状況や文脈から相手の意図を理解しやすい。ジェスチャーや表情など非言語的手段を使つての意思の疎通も可能になる。それに対し、書き言葉は非言語手段や場面状況の利用がしにくく、基本的に言葉によって意味の構築がなされるため、高度な言語能力が必要とされる。そのため、どの言語圏でも、正式な書き言葉の指導は話し言葉でのコミュニケーション能力が十分に身に付いた後に行われる。

これらのことを考えると、子どもに対する言葉の指導は、以下の3点を大きな原則とすることが望ましい。

- ① 理解と産出を同時に要求せず、十分な理解の段階を確保すること。
- ② 子どもの言語獲得は文法の理解からではなく、子どもにとって意味のあることばとの接触によること。
- ③ 話し言葉によるコミュニケーション力を身に付けた上で、書き言葉への指導に移ること。

日本語を母語として獲得している児童生徒は、日本語でのコミュニケーションには不自由しない。一方、JSL児童生徒は、日本語によるコミュニケーションが十分に行えない段階で、話し言葉と同時に書き言葉の世界にも触れざるを得ないところに、何らかの支援が必要になる。一般に子どもたちが学齢期前に経験する言語獲得期と就学後に学校で経験する知識獲得期が同時に進行しており、この点で多くの困難に直面することになる。

文字を学習することによって、これまでの話し言葉に加えて情報入手手段が増え、より多くの知識や概念を獲得することができるようになる。文字による理解を通して、思考力や認知力も同時に培われ、分析力、推察力など抽象的思考も可能になると言われる。読み書き能力は、子どもの言語能力、あるいは知的能力の育成には不可欠である。しかし、ここで注意したいのは、**書き言葉は話し言葉を文字にしたものではなく、語彙や文体、文章構成など、様々な点で異なる特徴を持っている**ということである。したがって、話し言葉が身に付けば書き言葉も分かるというものではなく、また読み書き能力の獲得は、話し言葉の獲得のように容易ではない。日本語の場合、特に文字学習には相当な時間と努力を要することを心得て、

指導の際には学習が継続・促進されるよう、情意面と技能面の両面で配慮することが必要である。

話す、聞く、書く、読むの4技能をバランス良く伸ばし、抽象的な思考や高度な学習の基礎となる言語能力を育成することは、JSL生徒も含め、中等教育段階の子どもに対する言語教育が目指すべき目標である。国語科教育では、これまで、少なくとも日本語の運用能力の基礎は問題がなく、日本語文化を基盤とし、将来的にも日本語によって高等教育や就業の機会を得ていく日本語母語生徒（JSL生徒と区別するため、**Japanese as a Native Language**の頭文字を用いて「**JNL生徒**」と呼ぶことにする）を対象と想定して指導を行ってきた。JSL生徒は、国語科の指導では必要のなかった基礎的日本語運用能力に関する支援を必要とする。また、日本語の読み書きのための十分な学習期間が確保されないうちに、高度な認知力を必要とする教科書等の理解と表出が求められる。そのため、**学習内容の焦点化**や**優先順位を示すこと**による負担の軽減、また**理解確認**や**表現方法に関する多様な選択肢の用意**など、日本語能力と切り離れた能力の発現を可能にする工夫も必要となる。

このような点で、JSL国語科では、日本語を母語として獲得していない生徒への支援活動として、国語指導と日本語（第2言語／外国語としての）指導を融合させたアプローチが求められる。

## 1-2 日本語支援の考え方と方法

JSL生徒の日本語による学習を促進させるためには、現在の知識と新たな学習事項の導入を用いて、これまでに体系化された日本語力をさらに拡大する必要がある。そのためには、児童生徒にとって有意味で理解可能な言語情報を与えることが大切になる。JSLカリキュラムの支援の方法が通常のカリキュラムと基本的に異なる点の一つは、**教師が自身の使用する日本語を意識化し、文法・語彙の知識や聴・読解力が十分ではない子どもたちにとって言語的に理解可能なものにする必要がある**ということである。

第二言語教育では、「世話人言葉」（幼児に向けられる大人の言葉）、「教師言葉」（外国語学習者に話しかける教師の特別な言葉）、「フォリナー・トーク」（非日本語母語話者に向けられる日本語母語話者の言葉）などと呼ばれているが、これらの言葉は、次のような特徴を持っている。

- ①単文が中心
- ②文法が制限される
- ③誇張されたイントネーション
- ④既知情報を多分に含む内容
- ⑤具体的事象に焦点化
- ⑥話者と聞き手による協力的コミュニケーション
- ⑦頻繁な繰り返し
- ⑧質問の復唱

要するに、教師は意識的、無意識的に児童生徒の言語レベルに合うように自分の言葉を調整している。これにより、児童生徒にとって、語彙の理解や話題の認識が容易になる。指示語が分かりやすくなり内容が明瞭になる。また、文法が簡略化されることで、文法構造が分かりやすくなり、学習内容を焦点化しやすくなる。繰り返し聞くことにより、言語構造と内容理解に時間がかけられるなどの利点が生まれることになる。

さらに、第二言語習得にかかわる知識としての「**手続き的知識(procedural knowledge)**」と「**宣言的知識(declarative knowledge)**」に注目して考えてみよう。「**手続き的知識**」とは、プラモデルの組み立て方や自動車の運転の仕方、料理の作り方など方法に関する知識を指す。一方、「**宣言的知識**」は、事実や言葉の意味などの知識を指し、教科内容をはじめ、日本語にかかわる規則、構造などの知識に相当する。「**手続き的知識**」は、実際に日本語をどう使うかという「日本語でできる」場合の知識で、「**宣言的知識**」は、言語の形式や意味などを頭で理解し、「**教科内容が分かる**」場合の知識ということである。この二つの知識の存在を認識し、「**分かる**」と「**できる**」を明確にして、国語科における言語技術修得への指導とその基礎力を培う日本語指導との統合を心がける必要がある。

これらは、小学校段階での JSL カリキュラムの基本方針とも共通するが、中学校段階では、特に上記の「**宣言的知識**」にあたる「**言語を分析的に見る力**」の育成が重要になる。目の前の事象や日常生活での実体験を離れ、より複雑化、抽象化が進んだ中学校の教科内容を理解し、理解を知識として積み上げていくためには、言語による正確な理解と整理が不可欠である。児童生徒がすでに獲得している知識や技能を考慮し、言語的調整および文脈・状況の整備をすることによって、授業内容が理解できるようにする支援が必要である。そして同時に、その理解を、言葉によって自分自身の中で体系的に再構築していけるようにするための指導が求められる。

JSL 生徒のこれまでの成育環境や学習状況等の多様性は、指導内容や方法にかかわる重要な要因となる。将来の生活・学習環境も多様であることを考慮しなければならない。将来的にどのような言語で学ぶことになっても、現時点での日本語による学習が基礎として生きるような言語能力の育成が目標となる。言葉による知識の獲得や高度な思考を支えるためには、日本語学習が単に眼前の日本語の理解にとどまらないよう、言語について考え、説明する力、すなわち**メタ言語能力を身に付ける**ことができるような支援が国語科の指導としてなされなければならない。

### 1-3 JSL 生徒への指導内容・方法・形態

取り出しでの指導を実施している場合、一般に国語科については最も遅くまで取り出しが続く。国語科は、日本語に関する知識や運用能力そのものが学習活動の内容であり目標となる。そのため、特に中学校段階になると、JNL 生徒と同様の日本語による言語活動を行うためには高度な日本語力が必要となるため、在籍学級での学習に合流することが困難と判断される。

他教科の場合、教科内容の学習については、学習項目を日本語の理解とある程度切り離して設定することができる。例えば、数学で  $n$  角形の内角の和を求める学習を行う場合、日本

語での説明が十分理解できなくとも、黒板に示された図形や、そこに引かれる補助線、記号、あるいは数式など非言語的情報の活用によって内容が理解できれば、学習目標は達成したと考えることができる。言い換えれば、そうした生徒の既有知識や非言語情報など、日本語の側面だけからではない理解のための多様な支援を工夫することによって、学習活動に参加できるようにすることが JSL 数学科の一つの役割だといえる。一方、国語科でも言語一般に関する知識など生徒の既有知識を理解の助けとして活用することはあるが、学習項目も活動内容も基本的に日本語と切り離して設定することはできない。従って、在籍学級で JNL 生徒と同じ目標での学習に参加するには、一定程度の日本語力を身に付けることが必須となり、それには日本語学習開始から数年以上かかるということになってしまう。

国語科の授業では、それぞれの単元ごとに、「段落の理解」「心情表現の読み取り」「要約文の作成」など、特に重点を置く学習項目が設定されるが、基本的にどの単元であっても、授業においては日本語の基本的要素を理解・運用する活動が展開される。さまざまな日本語素材に繰り返し触れ、その繰り返しの中で単語の意味の広がりや、文字使用の実際、文や発話全体の構成に関する意識、概要の把握など、言葉を理解し表現するための個々のスキルや知識を徐々に育成していく。そのような螺旋状のカリキュラムの先に、最終目標が形成される。つまり、それぞれの単元で示される学習目標は、全体に向けた繰り返しの中で、素材に適した焦点化がなされたもの（逆に言えば、焦点化した項目に適した素材を取り上げたもの）といえる。同じ素材を用いても、異なる学習項目に焦点を当てて学習を組むこともでき、同一素材を個々の生徒に合わせて焦点の当て方を調整することも可能である。

在籍学級での授業に参加することは、思春期の生徒にとって、教科学習という側面のみならず、**情意的・社会的側面**で重要な意味を持つ。JSL 生徒にとって、在籍学級の生徒達と同じ内容の素材を共有できること、一緒に学習活動に参加できることは、学習意欲や自信につながるとても大きな意味がある。JSL 生徒は、中学校の国語科で求められる日本語力には届かないところが多く、また4技能（話す・聞く・書く・読む）のバランスが著しく偏っていることもまれではない。聞いて理解できても話すことは難しい、聞いたり話したりすることは問題ないが読み書きには非常に大きな困難があるなど、学習活動の中でも、JNL 生徒と共にはできる活動とできない活動の差がある。したがって、JNL 生徒と同様の目標設定にこだわることは、JSL 生徒を在籍学級での学習に参加する機会から遠ざけてしまう、あるいは在籍学級の学習に参加しても学習の機会とはならない恐れがある。同級生との接点を持ちつつ、JNL 生徒の日本語力に適した学習を継続していくためには、在籍学級での国語科の授業を JSL 生徒にも開かれたものにする必要がある。本書の指導案に在籍学級での授業を想定したものが多く含まれるのは、そのような理由による。

JSL 生徒のみを対象とした日本語力伸長を目指した学習活動については、本 JSL カリキュラムでは日々の繰り返しとして着実に日本語力を伸ばす「**帯単元**」として提案した。日本語の文法事項や文字に関する指導、母語との比較などを通した一言語としての日本語の構造や特性、あるいは言語の普遍的な特性を理解する**メタ言語能力に関する指導は、毎日、短時間で設定される帯単元での取り出し指導として、継続的に行われることが適当である。**

## 2. 学習指導案の構成

### 2-1 学習指導案の読み方

本書では「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域のそれぞれについて、できるだけ多様な言語素材や言語活動を取り上げた授業の例が示せるよう配慮した。

各学習指導案（以下、「指導案」）には、単元の学習内容を端的に示すタイトルと、その単元のねらいや留意点、そして主な学習の領域、使用する教材、学習の目標、指導時間の目安、指導形態、そしてその単元で特に意識して指導を行うよう焦点化されている指導事項、言語スキルが示されている。

本書の指導案は、「日常会話については問題ないが、教科学習を日本語で行うには困難がある生徒」を対象として作成した。滞日年数や過去の学習歴、母語の状況などが千差万別であるJSL生徒について、国語科の学習の前提となる能力について「平均的能力像」を設定することは困難である。厳密に対象設定を行って指導案を作成することはかえって現実から離れることにもなりかねず、汎用性を失うことになるため、大まかに対象生徒像を設定し、指導案に個別対応を考えるためのヒントや具体例を要所ごとに盛り込んでいくこととした。指導案を読む際に、自分の担当する生徒を具体的に思い浮かべながら、指導案のステップ通りに進めるか、もう一段階細かな補助ステップを準備する必要があるかなどを考えながら読むことを期待している。

同様に、指導形態に関しても、実際の学校現場での指導体制の多様性や、JSL生徒の人数そのほかによって、同じ学習活動を在籍学級の中で展開する場合と、取り出しで行う場合、また在籍学級での活動を途中からJSL生徒だけのグループ活動として進めるなど、複数のバリエーションが示されているものもある。そうした例を参考に、それぞれの学校の状況に合わせて、指導案を展開させてほしい。

それでは、次のページで実際の指導案を例に、ポイントを説明しよう。

## 12 学校案内パンフレットをつくろう ～共同編集・制作～

本教材はワークショップという形態をとって学習を進めていくようにしている。ここでは、「話し合い」「インタビュー」「パンフレット制作」を通して、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域を総合的に学習しているだけでなく、制作グループによる学習活動の展開が示されている。教材は予定の6年生に向けて、中学校生活を紹介するためのパンフレット制作を目的としたものである。学習内容を例えば転入してくる外国人生徒のために活用できるように変更も可能であろう。

この単元のねらいや、配慮してほしい点など、指導案を見て頂くに当たっての作成者からのメッセージである。

1 領域 書くこと、話すこと・聞くこと（総合的な学習としても展開が可能）

2 教材 日本語で書かれたさまざまなパンフレット

3 目標

【JSL生徒の目標】

- ・パンフレットに使われている日本語の表現や文法を学ぶ。
- ・学校生活の様子に目を配り、日本語で表現する。
- ・制作グループでの話し合い活動で、自分の考えを述べる機会を多く持つ。

【JNL生徒の目標】

- ・制作グループでの話し合いで、日本語の表現や文法を学ぶ。
- ・ワークショップ形式の学習を通して、日本語で表現する。

指導案によっては、一つの授業の中でJSL生徒の目標とJNL生徒（日本語を母語とする一般の生徒）の目標をそれぞれに設定しているものもある。書き分けていない場合は全体の目標である。

4 指導時間 6時間

5 指導形態 在籍クラスで（指導体制としてT・A制とする）

6 指導事項・言語スキル

この単元で特に焦点を当てている指導事項と、それを実現するための具体的な言語スキルを領域ごとに示した。指導の際に特に意識してほしいポイントである。

領域	指導事項	言語スキル
話すこと	【話し合い】 ・話し合いの話題や方向をとらえて的確に話す	・それぞれの発言を注意して聞くことができる ・話題を理解することができる
聞くこと	・グループで話題について話し合うことができる	・聞いたことを確かめることができる ・積極的に聞くことができる ・それぞれの発言を注意して聞くことができる

7 指導計画

	学 習 活 動	伸ばしたい言語スキル	学習支援・指導・学習材
1次1時	○教材文を読んで学習の目標、流れを確認する ○パンフレットの役割について整理する。 ・身近な生活の中にあるパンフレットを日本語で書かれたものや英語で書かれたものなどを見せ、その役割や内容について話し合う。	・何について書かれているパンフレットなのかを判断することができる。 ・写真やイラスト、言葉の表現などに注目し、気になることをメモする。	★ルビ付きが必要な場合には用意する。 ★日本語（生徒の状況に応じて、英語）で書かれたパンフレットを数種類用意しておく。 ・なるべく身近に感じさせるパンフレットを用意する。 ・視覚的なものにも配慮する。

言語スキルを中心として、その学習活動を通して伸ばしたい力を示した。

JSL生徒のための配慮、留意点には★印を付けた。

## 2-2 JSL国語科として取り上げる素材や活動について

指導案を作成するに当たっては、トピックや素材の選択や学習活動の展開についても、多様な言語文化的背景を持ち、さまざまな異文化経験を経てきている JSL 生徒が、JNL 生徒と共に学ぶ国語科授業としての意義を、言語学習ばかりでなく多様な側面からとらえて検討した。日本語を使って、話す、聞く、書く、読むというさまざまな活動を行うということは、生徒にとって貴重な自己表現、他者理解の過程そのものである。日常的に、日本語日本文化の中で十分に自分の考えや思いを伝える機会を得られずにいることが多い JSL の生徒にとって、授業の中でじっくりと時間をかけ、必要な補助を得ながら自分の伝えたいことを言語化すること自体が、自分を見つめ、確認するという重要な意味を持つ。そして、言語習得を支え、促進する活動でもある。

また、JSL 生徒が日本語で発信することによって、JNL 生徒の側にとってもなかなか見えにくかった JSL 生徒の思いや、異なる言語文化社会に対する理解を促すことにもなる。自分の気持ちや考えを確かめ、深めようとする意欲を引き出す素材やトピックの選択、生徒間の異文化理解につながる活動の展開を、それぞれの指導案において意識した。「自分史年表」や「自分史新聞」を作成する活動を中心とした指導案は、このような観点から取り入れたものである。

生徒の生育歴を取り扱うことについては、人権保護の観点から、十分に配慮をすべきであることはいうまでもない。家庭環境や生育歴に関する極めて個人的な情報を不用意に扱うことは、差別感や偏見を助長することにもつながりかねないことは、常に意識する必要がある。しかし、同時に、JSL 生徒が自尊感情を持つことができるような教育的配慮も求められる。JSL 生徒の中には日本語・日本文化社会の中で、自分のアイデンティティを見失っている生徒も少なくない現実があるためである。それらの生徒にこそ、なぜ今自分がここにいるのか、自分のルーツは何なのかを再認識し、そして、自分の将来について考えることが必要である。日々の生活や学習など、人としての活動を支える基盤となるのは、自分自身を肯定的に認める自尊感情である。自分のことを新聞という形にしてクラスの仲間と交流し合うことによって、JSL 生徒と JNL 生徒がお互いの理解を深め、つながりを強くしていく。それが国際感覚を身に付けた人間となる大きな力となるという強い思いから、ここに示した指導案は多くの実践に基づき作成されたものである。学校全体での教育理念の共有のもとに、教師と生徒とのゆらぎない信頼関係・仲間集団の形成と、具体的な指導に際しての生徒との対話の積み重ねと教師の細心の配慮によって、はじめてその目的を実現することができる。そのことを念頭において、指導案を読んでほしい。

## 2-3 JSL国語科で古典を扱うことについて

中学校段階の国語科が前提とする JNL 生徒の日本語の知識・運用能力にくらべ、本カリキュラムの対象とする JSL 生徒は日本語力の点では習得途上にある。また長期滞在や永住を予定した生徒ばかりでなく、短期の滞在で出身国や第3国に移動していく生徒もいるなど、日本語そのものの習得をどこまで求めるかという点でもさまざまな議論がある。

JSL 国語科の目標は、多様な言語的背景を持つ子どもたちに対して、中学校段階で身に付

けるべき言語能力を国語科の学習を通して育てていくことにある。現代日本語も十分でない生徒に、古典の学習は必要かという疑問も当然ありえるが、JSL 生徒と JNL 生徒との力の差という点では、古典は国語科の中で最も差が小さい単元であるということもできる。教科書に取り上げられている古典の作品は、現代文の作品に比べ、内容的にも言語構造的にも分かりやすく、作品の大意を理解し、雰囲気をつかむことは比較的容易であるといえる。したがって、JNL 生徒とともに授業に参加できる余地が大きいこと、また古典は高校入試でも必ず取り上げられることから、進学希望の生徒には多少なりとも触れる機会を提供したいという意図から、古典を素材とした指導案を含めることにした。

学習指導要領で古典の指導は古典に親しむ態度の育成や日本の文化や伝統への関心を深めることとされているように、本書で「枕草子」を素材としてとりあげた指導案は、古文の言語的学習ではなく、あくまで古典の世界の雰囲気や言葉の流れ・リズムにふれることにとどめ、古典の世界を素材として、自分自身の創作へと展開する部分に重点を置くものである。

### 3. JSL国語科の指導目標

#### 3-1 ねらいとする言語活動（指導事項）一覧

「学習指導要領」の指導事項をベースとして、JSLカリキュラムで学ぶ生徒の実態を考慮しつつ国語科の概念知識の獲得や抽象的学習の基盤形成に不可欠な言語活動を精選し、指導事項として設定した。

本書の学習指導案では、特に学年の指定をしていない。「学習指導要領」では、目標、指導事項とも、第1学年、第2・3学年と分けて示されているが、JSLカリキュラムでは学年の枠を外し、中学生として身に付けるべき日本語の力（内容項目：学習指導要領では、「指導事項」「指導事項の配列」となっている部分に基づいて）を考えて、「重要な言語活動」を提案している。それは、このカリキュラムで学ぶ生徒たちの来日時期が様々であったり、日本語の力あるいは母語の力の個人差が大きかったりするため、学年枠に縛られることなく個に応じた指導を行う必要があると考えたためである。

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域および「言語事項」の指導事項は以下の通りである。

#### A 話すこと・聞くこと

発想や認識	・ 広い範囲から話題を求めて話したり聞いたりする。
考えや意図	・ 自分の考えや気持ちを相手に理解してもらえるように話す。 ・ 話し手の意図を考えながら話の内容を聞き取る。
話題	・ ふさわしい話題を選び出す。
構成や論理	・ 全体と部分、事実と意見との関係に注意して、話したり聞き取ったりする。 ・ 話の論理的な構成や展開を考えて、話したり聞き取ったりする。
語句や文	・ 説得力のある表現の仕方に注意して、話したり聞き取ったりする。
話合い	・ 話合いの話題や方向をとらえて的確に話す。 ・ それぞれの発言を注意して聞く。 ・ 相手の立場や考えを尊重し、話合いが目的に沿って効果的に展開するように話したり聞き分けたりする。

#### B 書くこと

発想や認識	・ 課題を見付け、材料を集め、自分の考えをまとめる。
事柄や意見	・ 自分の立場及び伝えたい事実や事柄、課題及び自分の考えや気持ちを明確にする。
選材	・ 適切な材料を選ぶ。
構成	・ 文章の形態に応じて適切な構成を工夫する。
記述	・ 根拠を明らかにし、論理の展開を工夫して書く。
推敲	・ 表記や語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、読みやすく分かりやすい文章にする。 ・ 文や文章を整えて、説得力のある文章にする。

評価・批評	<ul style="list-style-type: none"> <li>・題材のとらえ方や材料の集め方などについて自分の表現の参考にする。</li> <li>・論理の展開の仕方や材料の活用の仕方などについて自分の表現に役立つ。</li> </ul>
-------	---

## C 読むこと

語句の意味や用法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文脈の中における語句の意味を正確にとらえる。</li> <li>・文脈の中における語句の効果的な使い方について理解する。</li> </ul>
内容把握や要約	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文章の展開に即して内容をとらえる。</li> <li>・目的や必要に応じて要約する。</li> </ul>
構成や展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文章の構成や展開を正確にとらえる。</li> <li>・書き手の論理の展開の仕方を的確にとらえる。</li> </ul>
表現の仕方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表現の仕方や文章の特徴に注意して読む。</li> </ul>
主題や要旨と意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文章の展開を確かめながら主題を考えたり要旨をとらえたりする。</li> <li>・文章を読んで自分の意見をもつ。</li> </ul>
ものの見方や考え方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文章に表れているものの見方や考え方を理解する。</li> </ul>
情報の活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・必要な情報を集めるための読み方を身に付ける。</li> <li>・目的をもって様々な文章を読み、必要な情報を集める。</li> </ul>

## D. 言語事項

音声	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話す速度や音量、言葉の調子や間のとり方を意識する。</li> </ul>
単語・文法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単語の特徴を理解する（活用する語としない語、動詞の種類、漢字語の品詞、文中の語の照応・共起関係など）。</li> <li>・日本語の文構造の特徴を理解する。</li> </ul>
語句	<ul style="list-style-type: none"> <li>・語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係を理解する。</li> <li>・慣用句、類義語と対義語、同音異義語や多義的な意味を表す語句の意味や用法の理解を深める。</li> <li>・語構成に着目し、語句の理解力・類推力を高める。</li> </ul>
語彙	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事象や行為などを表す多様な語句について理解を深める。</li> <li>・話や文章の中の語彙について関心をもつ。</li> <li>・抽象的な概念などを表す多様な語句についての理解を深める。</li> <li>・概念や品詞、使用場面など多様な観点から語彙の関係性をつかむ。</li> </ul>
話や文章、文	<ul style="list-style-type: none"> <li>・段落の役割や文と文との接続関係を理解する。</li> <li>・文章や談話の構成を意識する。</li> <li>・相手や目的に応じた話や文章の形態や展開の違いを意識する。</li> <li>・話し言葉と書き言葉の違いを知る。</li> <li>・ジャンルによる文章構造、文体などの特性を理解する。</li> </ul>
言語生活	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話し言葉と書き言葉の使い分けを意識する。</li> <li>・ジャンルや内容に合った文体を選択する。</li> <li>・共通語と方言があることを理解する。</li> <li>・敬意表現（敬語など）を意識して言葉を使う。</li> </ul>

言語事項は、どの領域の学習を行う際にも必要となる基礎的な言語力に関する項目である。JSLカリキュラムで学ぶ生徒にとって、特に語彙の拡充が求められる。語句の読み方や意味、語用など（言語事項）について、国語辞書や電子辞書などを活用して調べようとする態度や習慣を養い、言葉に関する意識を高めるように、継続して指導を行う必要がある。

言語事項としてあげたものの大部分は、指導事項の一覧の中に組み込まれている。それぞれの領域の学習を行う中で意識して学習することを促すとともに、「帯単元」として言語事項に焦点を当て、継続して扱うことも必要である。日本語の言語としての特性に注目し、体系的に整理することは、これは日本語という特定の言語の理解にとどまらず、どのような言語の習得においても重要な力となる「メタ言語能力（言語について考え、説明する力）」を育成することにもつながる。複数の言語環境下で育ち、将来、日本語以外の言語で教育や就業の機会を持つ可能性の高いJSL生徒にとって、日本語学習を通じてメタ言語能力を育てることは、母語やその他の言語能力の伸長という点からも重要な意味を持つ。

### 3-2 言語スキル（指導事項を構成、具体化するスキル）

JSL生徒は、JNL生徒の場合には特に意識せずに通り過ぎてしまうような日本語の知識やスキルなどの不足によって学習活動が困難となる場合も少なくない。JSL生徒に対しては、そうした点を考慮し、**目標を構成する知識やスキルをより具体的に意識できるよう、スモールステップでの指導が重要**である。指導事項で示した力を身に付けるためには、何ができ、何が足りないのかを、生徒の具体的な学習行動に即して評価し、スモールステップでの目標立てを行う必要がある。そうした評価や目標設定の指標となるよう、指導事項を構成する具体的な言語スキルの例を以下に示す。

#### A. 話すこと・聞くこと

発想や認識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話す目的を理解し話材を選ぶことができる。</li> <li>・話している内容を正確に聞くことができる。</li> <li>・メモをもとに話すことができる。</li> <li>・聞いてメモをすることができる。</li> <li>・資料をもとに話すことができる。</li> </ul>
考えや意図	<ul style="list-style-type: none"> <li>・考えをまとめて話すことができる。</li> <li>・スピーチの内容を注意深く聞くことができる。</li> <li>・話している内容の中心をとらえることができる。</li> <li>・聞きながら自分の考えをもつことができる。</li> <li>・聞いて感想をもつことができる。</li> <li>・聞きながら他のことを連想することができる。</li> </ul>
話題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話題を探すために自分の体験を思い出すことができる。</li> <li>・話題を探すために日常生活に目を向けることができる。</li> <li>・適切な話題を選ぶことができる。</li> </ul>

構成や論理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話す内容や順序をメモすることができる。</li> <li>・最後までまとまりをつけて話すことができる。</li> <li>・主張する内容を明確にして話すことができる。</li> <li>・話し手の主張を理解することができる。</li> <li>・事実と考えの部分を明確にして話すことができる。</li> <li>・事実と考えの部分を聞き分けることができる。</li> <li>・スピーチの構成を考えることができる。</li> <li>・根拠や理由の述べ方が分かる。</li> </ul>
語句や文	<ul style="list-style-type: none"> <li>・適切な語句を選ぶことができる。</li> <li>・聞き手に分かりやすい表現をすることができる。</li> <li>・説得力がある表現を工夫することができる。</li> <li>・キーワード、キーフレーズを聞き取ることができる。</li> </ul>
話合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話題を的確にとらえることができる。</li> <li>・発言の内容を理解することができる。</li> <li>・自分の立場を明確にして意見を述べることができる。</li> <li>・根拠を述べることができる。</li> <li>・他の人の立場を考えて聞くことができる。</li> <li>・他の人の意見の根拠を聞き取ることができる。</li> <li>・他の人の意見を受けてその場で発表することができる。</li> <li>・根拠をもって反論することができる。</li> <li>・話し合いのルールが分かる。</li> <li>・話し合いに参加することを通して自分の考えを深めることができる。</li> </ul>

## B. 書くこと

発想や認識	<ul style="list-style-type: none"> <li>・書こうとすること、誰に向けて、何のために書くかを把握できる。</li> <li>・課題に関して自分の考えを明確に把握することができる。</li> </ul>
事柄や意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の立場や考えを明確に把握することができる。</li> <li>・課題について、既有知識や疑問などを整理することができる。</li> </ul>
選材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・必要な材料を集めることができる。</li> <li>・集めた材料から必要な情報を抜き出し、整理することができる。</li> <li>・集めた材料をもとに図や表などを作ることができる。</li> </ul>
構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・書く内容や順序をメモすることができる。</li> <li>・全体の構成を考えることができる。</li> <li>・事実と自分の意見を分けることができる。</li> <li>・主張について適切な根拠や理由を考えることができる。</li> <li>・必要に応じて図や表、写真などを、適切に取り込むことができる。</li> <li>・読みやすくするためにレイアウトを工夫することができる。</li> </ul>

記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ジャンルや内容に合った文体、語句を選択して書くことができる。</li> <li>・必要に応じて段落をもうけ、まとまりのある文章を書くことができる。</li> <li>・指示詞、接続詞を適切に用いることができる。</li> <li>・書き出しや結びを工夫して書くことができる。</li> </ul>
推敲	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表記や語句の用法が適切かどうか確かめることができる。</li> <li>・読み手の視点から、読みやすさ・分かりやすさを見直すことができる。</li> <li>・論理の一貫性が保たれているか確かめることができる。</li> <li>・自分の意見と事実、引用が書き分けられているか確かめることができる。</li> </ul>
評価・批評	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読み手のコメントから、文章の構成や表現などを見直し、改善案を考えることができる。</li> <li>・他者の作文を参考にし、自分の文章の構成や表現に役立てることができる。</li> </ul>

### C. 読むこと

語句の意味 や用法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・わからないことを辞書で調べられる。</li> <li>・文脈の中での語句の意味が分かる。</li> <li>・同音異義語の区別ができる。</li> <li>・類義語とその使い分けが分かる。</li> <li>・対義語が分かる。</li> <li>・慣用句が理解できる。</li> </ul>
内容把握や 要約	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事実と意見が読み分けられる。</li> <li>・キーワードやキーセンテンスが見つけられる。</li> <li>・段落ごとの要点が把握できる。</li> <li>・書き手の主張が把握でき、要約文が作成できる。</li> <li>・登場人物の関係、心情の変化を把握できる。</li> </ul>
構成や展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文章の中心の部分と付加的な部分が読み分けられる。</li> <li>・事実と意見が読み分けられる。</li> <li>・指示語・接続語の役割が分かる。</li> <li>・時間の経過や場面に着目して構成が理解できる。</li> <li>・起承転結や序論・本論・結論など、論理の構成パターンが分かる。</li> <li>・分かりやすい説明の仕方が分かる。</li> <li>・説得力のある論の進め方が分かる。</li> </ul>
表現の仕方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文末表現に着目し、筆者の態度や立場などの違いが分かる。</li> <li>・人物の行動や言動、表情の描写に着目し、心情を理解することができる。</li> <li>・多様な文章について、それぞれの表現の特色が分かる。</li> </ul>

<p>主題や要旨 と意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 文章の展開に従って、筆者の思考や心情を追うことができる。</li> <li>・ 人物相互の関係がつかめる。</li> <li>・ キーワードを抜き出すことができる。</li> <li>・ 段落ごとに主要な部分をマークすることができる。</li> <li>・ 接続語に着目して構成図が作れる。</li> <li>・ 時間の経過や場面に着目した構成図が作れる。</li> <li>・ 題名やキーワードからの主題を考えることができる。</li> </ul>
<p>ものの見方 や考え方</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 既存の知識や経験、情報と照合しながら読むことができる。</li> <li>・ 書き手の考えと自分の考えの共通点・相違点が見つけられる。</li> <li>・ 主題について深く考えることができる。</li> <li>・ 批判的な読みができる。</li> </ul>
<p>情報の活用</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 読んだことから課題を発見できる。</li> <li>・ 目的にあわせて文献や資料、メディアなどを選ぶことができる。</li> <li>・ 表題や目次を活用することができる。</li> <li>・ 資料（グラフ・絵・写真など）を活用しながら読むことができる。</li> <li>・ 複数の情報を比較しながら読むことができる。</li> <li>・ 必要な情報を取捨選択することができる。</li> <li>・ 読んで得た情報を整理分類することができる。</li> <li>・ 読んで得た情報を目的に合わせて再構成することができる。</li> <li>・ 読んで得た情報を発信することができる。</li> </ul>